

## 目的語となる上代の準体句について

小出 祥子 (修文大学短期大学部)

### 要旨

万葉集において、目的語を準体句で表す場合、①格助詞を後接しない例(無助詞準体句)と、②後接する例(ヲ格準体句)がある。

① うち靡く春来らし 山の際の遠き木末の咲きゆく 見れば (尾張連、08/1422)

② 石見なる高角山の木の間ゆも 我が袖振る を妹見けむかも (柿本人麻呂、02/0134)

無助詞準体句の例のほとんどに、準体句の内容を契機とする「話し手の心的内容」が共起する。それに対して、ヲ格準体句にそのような特徴はない。この現象から、無助詞準体句は、形態上の述語の目的語ではなく、「話し手の心的内容の契機」としての意味的役割を持つと考えられる。ヲ格準体句は、心的内容の契機に偏らず、形態上の述語の目的語として機能するといえる。理由として、準体句が無助詞である場合、準体句と同様の形態である連体形終止文に見られるような、感動喚体的特徴が強く現れるためであることと、ヲ格準体句は格助詞ヲを後接することで、後続の述部用言との関係が明示され、目的語として機能するのだという考えを述べた。

### 0. はじめに一問題の背景—

筆者は拙稿(2013)で、万葉集を資料として、「見む」の対象の意味的な傾向について調査を行った。その結果、対象が準体句で表される場合には、体言で表される場合に対して、以下のような異なる特徴が見られることを述べた。

(1) 岩網のまた変若ちかへりあをによし 奈良の都 をまとも 見む かも(又将見鴨)

(06/1046)

(2) 霍公鳥来居も鳴かぬか 我がやどの花橘の地に落ちむ 見む (地二落六見牟) (10/1954)

(1)において、「見む」の対象は「奈良の都」という体言によって表示されている。そして、その対象は現実に存在する。それに対して、(2)の対象「我がやどの花橘の地に落ちむ」の句末に体言の形式はない。現代語で表せば「家の庭の花橘が地に落ちるの」のように、ノが介入する。いわゆる準体句の形式を成している。そして、言表されているのは、将来に起こる事態であり、現時点には存在していない非現実事態である。万葉集における全例を調査した結果、「見む」の対象が非現実事態のとき、必ず準体句で表示されることが明らかになった<sup>1</sup>。

しかし、「見む」の対象を表す体言および準体句との関わりにおいて、現実事態と非現実事態が区別される合理的な理由を示すことはできていない。そこで本稿では、目的格に

<sup>1</sup> 本稿は、「見む」の対象として、体言と準体句のみを調査対象としている。調査対象外の用例として、「見む」の対象にク語法が現れる例が1例存在することを報告する。

天霧らし雪も降らぬか いちしろくこのいつ柴に降らまく を 見む (帯巻平将見)

(若桜部君足、08/1643)

準体句が現れる構文の中で、述語用言が「見む」となる構文の位置づけを探り、その準体句に非現実事態が集中する現象の意味を問う。更に、準体句に後接する格助詞の有無で構文を分類し、その形態的特徴から目的語たる準体句の意味的役割を説明する。

## 1. 「見む」の対象を表す準体句

「見む」の対象が準体句で表示される全例を以下に挙げる。

- (2) 霍公鳥来居も鳴かぬか 我がやどの花橘の地に落ちむ 見む (地二落六見牟)  
(10/1954、再掲)
- (3) この夕秋風吹きぬ 白露に争ふ萩の明日咲かむ 見む (明日将咲見) (10/2102)
- (4) 秋風は疾く疾く吹き来 萩の花散らまく惜しみ競ひ立たむ 見む (競立見) (10/2108)
- (5) 住吉の出見の浜の柴な刈りそね 娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ 見む (閩将往見)  
(柿本人麻呂歌集、07/1274)
- (6) この雪の消残る時にいざ行かな 山橘の実の照る も 見む (實光毛将見)  
(大伴家持、天平勝宝2年12月、19/4226)
- (7) ひさかたの雨も降らぬか 蓮葉に溜まれる水の玉に似たる 見む (玉似有将見)  
(16/3837)
- (8) 海原の遠き渡りを 風流士の遊ぶ を見む と (遊乎将見登) なづさひぞ来し  
(天平9年2月、06/1016)

(2)「我がやどの花橘の地に落ちむ」、(3)「白露に争ふ萩の明日咲かむ」、(4)「萩の花散らまく惜しみ競ひ立たむ」、(5)「娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ」という句全体が「見む」の対象を成す。句末にムがあることから分かります、(2)～(5)において「見む」の対象である事態は、まだ成立していない非現実事態である。(6)、(7)は動詞が句末に現れる例である。(6)は「山橘の実の照る」という事態が対象である。「いざ行かな」とある通り、いまだ見たことのない景色が「見む」の対象となっており、発話者はその事態を想像することしかできない。非現実事態として観念的に詠んでいる例である。(7)は「蓮葉に溜まれる水の玉に似たる」という事態が対象である。句末を構成する「似る」は、主体に変化が起らず、専ら状態を表す動詞である。(2)～(5)において、ムに前接する動詞「落つ・咲く・立つ・濡れる」が、主体に変化が起こるという意味で、非意志的でありながらも動作性が認められるのと対照的である。(7)において、「見む」の対象を成す句は、「蓮葉に溜まれる水の玉に似る」という状態の継続が句末タリによって表わされている。テンス性はなく、この句のみから、事態の成立時点を未来・現在・過去のいずれかに決定することはできない。しかし、「ひさかたの雨も降らぬか」とある通り、まだ雨は降っておらず、その雨が蓮葉に溜まることによって達成される「蓮葉に溜まれる水の玉に似たる」という事態も起こっていないと考えられる。この例も非現実事態が「見む」の対象となっているといえる。

以上、(2)～(7)に現れる準体句の表す事態は、全て非現実事態である。また、全ての準体句が格助詞を後接せずに目的格に出現しているという形態上の特徴が見られる。

ただし、(8)の様相は(2)～(7)と異なる。形態上の特徴を見ると、(2)～(7)の準体句が格助詞を後接していないのに対し、(8)では格助詞ヲが介入していることと、「準体句ヲ見ム」

全体が卜節内にあるという違いが見られる。また、(8)は、巨勢宿奈麻呂の家で行われた宴会で詠まれた歌である。「海原の遠い舟路を、風流士の遊ぶのを見ようと、苦勞してやってきた。」の意である。左注に「右の一首、白き紙に書いて屋の壁に懸著く也。題して云はく、蓬萊の仙媛の化れる囊籜は、風流秀才の士の為なり。これ凡客の望み見る所ならじか、といふ。」とあり、鬘に化身した仙女の、蓬萊の島からやってきた様子を、詠み手が仙女になり代わって詠んだものである。準体句「風流士の遊ぶ」は、仙女が「見む」と志した時点においては、実現していなかった可能性が高い。しかし、宴会の参加者を「風流士」と捉えれば、準体句「風流士の遊ぶ」という事態は、歌が詠まれた時点において、まさに眼前に成立している。

本稿では、(2)～(7)と(8)とは分けて分析するべきであると考え。そこで、まず、準体句が格助詞を後接せずに目的格に現れる(2)～(7)の形態的特徴に注目する。「見む」以外の述語動詞節において、格助詞を後接しない準体句(以下、無助詞準体句)が目的格に現れる場合、どのような特徴が見られるのか。次節で考察する。(8)の特徴を持つ準体句については、第3節において述べる。

## 2. 目的語となる無助詞準体句

万葉集中において、目的格に現れる無助詞準体句は35例確認される。準体句を目的語とする述部の内訳は以下のようなものである<sup>2</sup>。

(表1)準体句を対象とする述部

目的格を要求する述部	見れば	22
	見む	6
	見つつ	3
	見まく	1
	思へば	2
	知らに	1

準体句が目的格に現れる35例のうち、「見る」を構成要素に含む形式が32例を占めており、その割合は9割を超える。準体句を対象とする述部に「見る」が表れやすい傾向は、中古においても同様であり、青木博史(2005)も準体句が目的格に現れる場合について、述語用言が「聞く」「見る」「形容詞+思ふ」など感覚・感情を表すものにほぼ限られることを指摘している(ただし、この指摘は無助詞準体句に限っておらず、格助詞が後接する準体句も含めてなされたものである)。青木(2005)は、中古語における準体句を「判断や感情・感覚の「対象」として用いられているといえる」(pp.50)とまとめている。

上代においても、無助詞準体句は、中古語と同様に、判断や感情・感覚の「対象」として用いられると言えそうである。

次に、事態の現実/非現実という点に注目すると、述語「見れば」「見つつ」「見るごと」の対象は、まさしく発話者が視覚的に確認している事態であり、非現実の事態は出現し得ない。目的格に現れる準体句が表わすのは、殆どが現実に成立している事態である。「見む」の目的格に現れる準体句だけを観察すると、準体句はあたかも非現実の事態を表す専用の形式のように見えていたが、全体を見ると、ほとんどの準体句は現実事態を現す。

また、表1によれば、述語用言「見む」を除く、29例は、準体句が従属節に現れている。

<sup>2</sup> あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(額田王、01/0020)の「君が袖振る」は「見ず」の目的語ではなく、連体形終止構文だとする説(澤瀉久孝(1957)伊藤博(1995))もあり、本稿では、この無助詞準体句を目的語の確例とはみなしていない。

- (9) うらさぶる心さまねし ひさかたの天のしぐれの流らふ 見れば (天之四具礼能 流相見者) (長田王、和銅5年4月、01/0082)
- (3) この夕秋風吹きぬ 白露に争ふ萩の明日咲かむ 見む (明日将咲見) (10/2102、再掲)

そこで、以下では、従属節の目的格に現れる無助詞準体句と、主節の目的格に現れる無助詞準体句を分けて考察する。

2. 1. 従属節で目的語となる無助詞準体句

従属節に現れるのは、「見れば」「見つつ」「見まく」「思へば」「知らに」の目的語となる準体句である。以下に例を挙げる。二重線で示したのが準体句の直接の述語であり、波線で示したのが主節である。

- (9) うらさぶる心さまねし ひさかたの天のしぐれの流らふ 見れば (天之四具礼能 流相見者) (長田王、和銅5年4月、01/0082、再掲)
- (10) 海原のゆたけき 見つつ (海原乃 由多氣伎見都々) 葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ (大伴家持、天平勝宝7年2月13日、20/4362)
- (11) 九月の白露負ひてあしひきの山のもみたむ 見まくしもよし (山之将黄變 見幕下吉) (10/2200)
- (12) 世間は数なきものか 春花の散りのまがひに死ぬべき 思へば (思奴倍吉於母倍婆) (17/3963、大伴家持、天平19年2月20日)
- (13) 山守のありける 知らに (山守之 有家留不知尔) その山に標結ひ立てて結ひの恥し  
二 (大伴坂上郎女、03/0401)

既に表1で示した通り、直接の述語には「見る」を含む語が多い。また、その主節述部にも特殊な傾向が見られる。以下で確認する。

2. 1. 1. 主節述部の特徴

無助詞準体句が従属節内の目的格に現れるとき、主節にはどのような特徴があるのか。以下の表2で、主節述部の形式を具体的に示した。

(表2) 従属節に準体句を持つ主節述部

従・述部	主節述部
見れば	難波の宮に我ご大君国知らすらし
	うべ知らすらし
	うち靡く春来るらし
	うち靡く春さり来らし
	黄葉する時になるらし
	里ゆ異に露は置くらし
	秋の露は移しにありけり

	時は来に <u>けり</u>
	時鳥鳴くべき時に近づきに <u>けり</u>
	心苦し <u>も</u>
	流るる涙留めかねつ <u>も</u>
	悲しきろ <u>かも</u>
	生けりとも逢ふべくあれ <u>や</u>
	世の中を常なきものと今 <u>ぞ</u> 知る
	世の中に心付けずて思ふ日 <u>ぞ</u> 多き
	いにしへ <u>思ほゆ</u>
	大和し <u>思ほゆ</u>
	家人の我れを見送ると立たりしもころ
	おほほしみ
	我れは験なし
	うらさぶる心さまねし
見つつ	難波に年は経ぬべく <u>思ほゆ</u>
	旅をよろしと思ひつつ
	物思ひもなし
見まく	よし
思へば	しかある恋にもありし <u>かも</u>
	世の中は数なきもの <u>か</u>
知らに	その山に標結ひたてて結ひの恥しつ

- (14) うち靡く春来るらし 山の際の遠き木末の咲きゆく 見れば (開往見者)  
 (尾張連、08/1422)
- (15) 秋の露は移しにありけり 水鳥の青葉の山の色づく 見れば (色付見者)  
 (三原王、08/1543)
- (16) 廬原の清見の崎の三保の浦のゆたけき 見つつ (見穂之浦乃 寛見乍) 物思ひもなし  
 (田口益人、03/0296)
- (17) うつせみの常なき 見れば (宇都世美能 常无見者) 世の中に心付けずて思ふ日ぞ多き [一云 嘆く日ぞ多き]  
 (大伴家持、天平勝宝2年3月、19/4162)

主節述部の文末に助辞ラシやケリおよび「思ほゆ」という語句が目立つ。また、意味的特徴としては、心情を表す場合が多い。ラシは一般的に根拠ある推定を表すとされる。考察対象においては、「準体句+見ればーラシ」という形式を成している。例えば(14)では、準体句「山の端の遠い梢がだんだん咲いていく」を根拠とした推定「春が来た」がラシ句で示される。また、ケリは過去・回想を表すとされており、「準体句+見ればーケリ」という形式で見れる。(15)では、準体句の表わす内容「青葉の山が赤や黄に染まる」が、「秋の露は染料だった」という回想をする契機となっている。また主節述部が心情を表す場合も、「見れば」や「見つつ」などに続くことから分かるように、準体句で表わされた事態を見

たことによって、心情が引き起こされている。例えば(16)では、主節述部で「なんら思い悩む事もない」という心情が表されているが、その契機は準体句が表す「廬原の清見の崎の三保の浦の広々とした様子」を見たことである。主節の中に明確に心情を表す語が使用されていない例もある。しかし意味内容は、心内に起こった感情を表すものや、準体句の内容を受けての感想で占められる。例えば、(17)では、準体句が表す内容「人の身が儂いこと」が引き起こした「世俗の事にあまり心を染めずに思う日が多い」という感情に関わる事態が主節で語られる。また(17)のように係り結びの構造を成す例や、終助詞を後接する例も多い。事態をそのまま描写しているのではなく、発話者の主観を通した心情に近い内容であることを反映している。

ラシ句が表す推定は、準体句が表す事態を契機として、心に起こった内容であった。また、ケリ句も、準体句の内容が発話者の心内に引き起こした過去・回想を表す。その他、主節述部に「思ほゆ」が現れている用例等、準体句の内容を契機として、心に起こったことが主節に述べられる例ばかりである<sup>3</sup>。無助詞準体句が従属節の目的語として現れる場合、準体句の内容は心的内容の契機であり、主節述部にはそれを契機とした心的内容<sup>4</sup>が表されるとまとめることができる。これは、体言が目的語となる場合には見られない<sup>5</sup>、準体句特有の現象であり、注目される。「準体句+見れば/見つつ・・・」という形式を成す場合、準体句は「見る」の対象ではなく、意味的役割としては、主節述部に現れる心的内容の契機を表す。例えば、(18)(19)のような、準体句が「まさりたるらし」「苦し」という心的内容の対象となる例に近い。現象的に直接の述部に「見る」が現れる場合が多いのは、心的内容の契機は、視覚を通して認識されることが多いためであろう。

(18)賢しきと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし(醉哭為師)まさりたるらし

(大伴旅人、03/0341)

<sup>3</sup> 従属節述部に「知らに」が現れる例は他の例と比べて、準体句事態と主接述部の関係が、異なるように見える。

(13)山守のありける知らに(山守之 有家留不知尔)その山に標結ひ立てて結ひの恥しつ

(大伴坂上郎女、03/0401、再掲)

娘の坂上二嬢と駿河麻呂を結婚させようとしていた(=その山に標結ひ立て)坂上郎女が、駿河麻呂に愛人がいる(=山守のありける)という噂を聞いて失望した気持ちを詠んだ歌である。主節述部「恥しつ」は、「山守のありける」という事態を知らなかった(=知らに)ことによって起こった感情ではない。知ったことによって起こる感情である。他の例では、従属節述部が、主節述部の心的内容の起こる条件を示していたが、この例では示していない点で異なっている。ただし、準体句「山守のありける」自体は、心的内容「恥しつ」の契機と捉えることができる。したがって、他の例と「知らに」の例との差は、本稿が注目する構文的特徴に由来するものではなく、「知らに」が打ち消し表現を含んでいることに由来するものであるため、本稿の結論に影響しない。

<sup>4</sup> 主節の内容が「心的内容」であるという判断は、ケリ・ラシ等の助辞や「苦し」「おほほしみ」等の語という形態的特徴によるものと、意味的特徴によるものが混在している。準体句の構文論的な役割を考える上で、今後、それぞれの場合を詳細に考察する必要があると思われる。本稿では、準体句と心的内容が共起するという傾向を重視し、形態的特徴によって心的内容であると判断できる例と、意味的特徴によって心的内容であると判断できる例を一括して扱っている。

<sup>5</sup> 体言が助辞を後接せず従属節の目的語となる場合、直接の述語には「見る」以外の語も現れる(イ)。

(イ)久方の天の川に上つ瀬に玉橋渡し下つ瀬に舟浮け据ゑ雨降りて風吹かずとも風吹きて雨降らずとも裳濡らさずやまず来ませと玉橋渡す(藤原房前、09/1764)

体言が「見る」の目的語となる場合も、主節述部の内容の直接の契機を表すとは限らない。(ロ)

(ロ)春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ

(山上憶良、天平2年1月13日、05/0818)

- (19) 衣手に水渋付くまで植ゑし田を引板我が延へまもれる 苦し (真守有栗子)  
(尼、08/1634)

本節では、助辞を後接せずに従属節の目的語となる構文的条件において、準体句は、主節が表わす心的内容の契機を成すという意味的役割を確認した。

## 2. 2. 主節で目的語となる無助詞準体句

次に、無助詞準体句が主節の目的格に現れる場合を見る。以下に全例を挙げる。この場合、述部には「見む」が共起する。

- (2) 霍公鳥来居も鳴かぬか 我がやどの花橋の地に落ちむ 見む (地二落六見牟)  
(10/1954、再掲)
- (3) この夕秋風吹きぬ 白露に争ふ萩の明日咲かむ 見む (明日将咲見)  
(10/2102、再掲)
- (4) 秋風は疾く疾く吹き来 萩の花散らまく惜しみ競ひ立たむ 見む (競立見)  
(10/2108、再掲)
- (5) 住吉の出見の浜の柴な刈りそね 娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ 見む (閩将往見)  
(柿本人麻呂歌集、07/1274、再掲)
- (6) この雪の消残る時にいざ行かな 山橋の実の照る も見む (實光毛将見)  
(大伴家持、天平勝宝2年12月、19/4226、再掲)
- (7) ひさかたの雨も降らぬか 蓮葉に溜まれる水の玉に似たる 見む (玉似有将見)  
(16/3837、再掲)

これらの例には、前節で見たような心的内容は共起しない。準体句が従属節に出現する場合と、主節に出現する場合に、なぜこのような違いが現れるのだろうか。

ここで注目したいのは、「見む」が推量・意思表示を含んでいる点である。準体句の表す事態について、発話者がこれから見るものとして言表している。事態について視覚的な認識が成立していないため、心的内容は起りようがない。

ただし、全てが2文から成っており、もう一方の文は、希求や禁止文、命令文等、第三者に働きかける文が集中して現れる。希求や禁止文、命令文は、準体句事態を成立させるための条件を表す。準体句で言表する事態は、ただ「見る」ことを推量した事態ではない。「見たい」と発話者が望む事態であることは明らかである。また、準体句の表す事態は、他の歌でもよく詠まれるモチーフに偏っている(20~23)。詠歌の対象として確立された事態であり、経験することで何らかの感動を引き起こすことが予想される事態である。

- (20) 霍公鳥花橋の枝に居て鳴き響もせば花は散りつつ (10/1950)
- (21) 白露に争ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な降りそね (10/2116)
- (22) 大夫は御狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜びを  
(山部赤人、天平6年3月、06/1001)
- (23) 安胡の浦に舟乗りすらむ娘子らが赤裳の裾に潮満つらむか (天平8年、15/3610)

(2)から(7)の構文的環境および準体句の意味的内容から、本節で考察した準体句も、心的内容の契機に相当する性格を持つといえる。ただし、まだその事態が認識されていないために心的内容は形成されておらず、表記されないのだと考えられる。

### 2. 3. 無助詞準体句の意味的役割

無助詞準体句が従属節の目的語となる例と、主節の目的語となる例は、以下の様に示すことができる。

[無助詞準体句が従属節に現れる場合]

あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ 見れば 心苦しも  
 従属節【 心的内容の契機 視覚(認識) 】 主節【 心的内容】

[無助詞準体句が主節に現れる場合]

霍公鳥来居も鳴かぬか 我がやどの花橋の地に落ちむ 見む ϕ  
 主節【 心的内容の契機 視覚(認識していない) 心的内容は起こらない】

目的格に無助詞準体句が現れるとき、その準体句は心的内容の契機を表すという特徴を示した。そして、準体句の内容が認識された場合には、準体句は従属節に現れ、主節では心的内容が言表される。それに対して、未だ準体句の内容が認識されていない場合、心的内容は起こり得ず、表明されない。そのため、無助詞準体句を目的語とする述部が、推量意思表示を含む場合、主節に集中して出現する。

拙稿(2013)において、視覚の対象は現実事態に属す傾向があることを述べた。その傾向から外れる準体句の例を本稿で観察したわけである。無助詞準体句が、「視覚の対象」というよりも、「心的内容の契機」という意味的な役割を持っていることを明らかにしたことで、拙稿(2013)との関わりにおいて言えば、今回の調査によって、視覚の対象と現実事態のより密接な結びつきを示したことになる。

### 3. 目的語となる助詞ヲを伴う準体句

以上、目的格に現れる無助詞準体句が、心的内容の契機であることを確かめた。しかし、資料とした万葉集は和歌集であり、その性格上、そもそも心的内容の契機が描写されやすいという可能性もある。そこで、以下では、目的格の準体句に格助詞ヲが後接する例を全例挙げ(全21例)、考察し、「心的内容の契機」を表すのは無助詞準体句特有の現象であることを示す。

次の例では、準体句を目的語とする主語名詞句に、三人称が現れる。(8例/21例中)

(24)思ひにしあまりにしかば にほ鳥のなづさひ来しを(足沾来)人見けむかも  
 (柿本人麻呂歌集、11/2492)

(25)月しあれば明くらむ別も知らずして寝て 我が来しを(寐吾来乎)人見けむかも  
 (11/2665)



- (26) 門に出でて我が臥い伏すを(吾反側乎)人見けむかも【一云 すべをなみ出でてぞ行きし家のあたり見に】  
(12/2947)
- (27) にほ鳥のなづさひ来しを(奈津柴比来乎)人見けむかも  
(柿本人麻呂歌集、12/2947(異伝))
- (28) 石見なる高角山の木の間ゆも 我が袖振るを(吾袂振乎)妹見けむかも  
(柿本人麻呂、02/0134)
- (29) 赤駒が門出をしつつ出でかてにせしを見立てし(世之乎見多互思)家の子らはも  
(14/3534)
- (30) 人さへや見継がずあらむ 彦星の妻呼ぶ舟の近づき行くを(近附往乎)【一云 見つつあるらむ】  
(10/2075)
- (31) 我が宿の萩咲きにけり 秋風の吹かむを待たば(将吹乎待者)いと遠みかも  
(大伴家持、天平勝宝2年6月15日、19/4219)

仮に、準体句が、話し手の心的内容の契機であるならば、それを目的語とする主語名詞句は基本的に話し手自身(1人称)であるはずだ。それに対して、(24)～(27)の主語は「人」、(28)の主語は「妹」、(29)は「家の子ら」、(30)は「人」、(31)は「我が宿の萩」である。準体句が心的内容の契機であるとは言えず、むしろ、誰かが「見る」ということ自体に焦点のある例が多い。

(32)(8)も、「見る」こと自体に焦点のある例である。

- (32) あしひきの 八つ峰の上の 梅の木 の いや継ぎ継ぎに 松が根の 絶ゆることなく  
あをによし 奈良の都に 万代に 国知らさむと やすみしし 我が大君の 神ながら  
思ほしめして 豊の宴 見す今日の日は もののふの 八十伴の男の 島山に 赤る橘  
うずに刺し 紐解き放けて 千年寿き 寿き響もし ゑらゑらに 仕へまつるを(仕奉  
乎)見るが貴さ  
(大伴家持、天平勝宝4年、19/4266)
- (8) 海原の遠き渡りを 風流士の遊ぶを(遊乎将見登)見むとなづさひぞ来し  
(天平9年2月、06/1016、再掲)

(32)は、「もののふの 八十伴の男の～ゑらゑらに 仕へまつる」ことが貴いのではない。「その様子を見ること」が貴いとある点は、無助詞準体句の例の様相と大きく異なる。(8)は、第1節において、例外とした例である。「なづさひぞ来し(苦勞してやってきた)」と心情を含む述部が見られるが、その理由は「風流士の遊ぶを見む」である。

また、以下の例も、準体句が心情の契機を表しているとはいいがたい。

- (33) あしひきの み山もさやに 落ちたぎつ 吉野の川の 川の瀬の 清きを見れば(浄乎見者)上辺には 千鳥しば鳴く。下辺には かはづ妻呼ぶ ももしきの 大宮人もをちこちに 繁にしあれば 見るごとに あやに乏しみ 玉葛 絶ゆることなく 万代にかくしもがもと 天地の 神をぞ祈る 畏くあれども  
(笠金村、神亀2年5月、06/0920)
- (34) 梅の花折りかざしつ 諸人の遊ぶを見れば(阿蘇夫遠美礼婆)都しぞ思ふ

(土師御道、天平2年1月13日、05/0843)

(33)において、準体句「吉野の川の 川の瀬の 清き」は見る対象ではあるが、「見れば」に続くのは、「上辺には 千鳥しば鳴く 下辺には かはづ妻呼ぶ(上流では千鳥がしきりに鳴き、下流では蛙が妻を呼んでいる)」という視線の先に広がる情景である。(34)は、「諸人の遊ぶ」という情景を契機として、「都しぞ思ふ」という心情が述べられている。準体句が心情の契機を表しており、無助詞準体句を目的語とする構文の構造とよく似ている。しかし、『日本古典文学全集 万葉集2』の注でも述べられている通り、「己の動作を条件にして、それによって引き起こされる感情を述べる文の下句には、思フよりも思ホユが現れるのが普通。」である。では、「しぞ思ふ」はどのように使用される形式なのか。以下で、確認する。

(35)秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ(君乎思曾念)(10/2294)

(36)淡路島門渡る船の楫間にも我れは忘れず家をしぞ思ふ(伊弊乎之曾於毛布)

(天平2年11月、17/3894)

(37)よしゑやし恋ひじとすれど秋風の寒く吹く夜は君をしぞ思ふ(君乎之曾念)

(10/2301)

(38)終へむ命ここは思はずただしくも妹に逢はざることをしぞ思ふ(言乎之曾念)

(12/2920)

(39)梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ(伎美乎之曾於毛布)

(市原王、天平宝字2年2月、20/4500)

上例を見ると、「しぞ思ふ」は「立ちても居ても(休むときもなく)」や「淡路島門渡る船の楫間にも我れは忘れず(淡路島の瀬戸を渡る船の楫を操る間さえも忘れず)」「恋ひじとすれど(恋などしなないと思つても)」「終へむ命ここは思はず(死ぬことは何とも思わないが)」「心もしのに(心もしおれるほど)」等の表現と共に用いられている。「しぞ思ふ」は、何かによって引き起こされた心情を表すのではない。常に心を離れずに恋しく思う対象を表す形式である。とすれば、(34)も、「諸人の遊ぶ」を契機として「都しぞ思ふ」が引き起こされたと解釈するのは誤りだろう。「都」は常に心から離れずにある対象であると考えべきであり、「諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ」は、「人々の遊ぶのを見て、都のことばかり思う」のように解するべきである。

また、格助詞ヲを後接する準体句は、無助詞準体句と連体構造が異なる例も存在する。以下のようないわゆる形状性準体の例である。(5例/21例中)

(40)白栲の 袖さし交へて 靡き寝し 我が黒髪 の ま白髪に なりなむ極み 新世に と  
もにあらむと 玉の緒の 絶えじい妹と 結びてし ことは果たさず 思へりし 心は  
遂げず 白栲の 手本を別れ にきびにし 家ゆも出でて みどり子の 泣くをも置き  
て(哭乎毛置而)朝霧の をほになりつつ 山背の 相楽山の 山の際に 行き過ぎぬれ  
ば 言はむすべ 為むすべ知らに 我妹子と さ寝し妻屋に 朝には 出で立ち偲ひ  
夕には 入り居嘆かひ 脇ばさむ 子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の

- 哭のみ泣きつつ 恋ふれども 駿をなみと 言とはぬ ものにはあれど 我妹子が 入りにし山を よすかとぞ思ふ (高橋、天平16年7月20日、03/0481)
- (41)来むと言ふも来ぬ時あるを 来じと言ふを(不来云乎)来むとは待たじ来じと言ふものを (大伴坂上郎女、04/0527)
- (42)にほ鳥の葛飾早稲をにへすとも その愛しきを(曾能可奈之伎乎)外に立てめやも (14/3386)
- (43)紫草は根をかも終ふる 人の子のうら愛しけを(宇良我奈之家乎)寝を終へなくに (14/3500)
- (44)阿遲可麻の瀉にさく波平瀬にも紐解くものか 愛しけを置きて(加奈思家乎於吉豆) (14/3551)

準体句を連体構造の違いによって分類すると、(40)～(44)のような形状性準体と、(14)のような作用性準体に分けることができる。

- (14)うち靡く春来るらし 山の際の遠き木末の咲きゆく 見れば(開往見者) (再掲)

現代語文法の分け方では、形状性準体は「内の関係」に、作用性準体は「外の関係」に対応する。「内の関係」とは連体修飾のあり方の1種である。例えば、「昨日読んだ本」のように主名詞「本」に格助詞ガ・ヲ・ニなどを付けて、修飾部用言「読んだ」と結び付けられるような関係を言う。「昨日読んだ本」は「昨日本ヲ読んだ」となるので、「内の関係」である。それに対して、「外の関係」は、主名詞と修飾部用言に格関係がない。例えば、「さんまを焼くにおい」の主名詞「におい」は、修飾部用言「焼く」とどのような格関係も成り立たないため、「外の関係」である。準体句について言えば、そもそも準体句に主名詞は存在しない。しかし、形状性準体であれば、仮に、ヒト(やモノ)を想定することができる。例えば(40)「みどり子の泣く」は、意味的には「泣いているみどり子」となり、想定される主名詞は「みどり子」である。準体句部「泣く」と、想定される主名詞「みどり子」の間に格関係が認められ、「内の関係」を成しているといえる。それに対して、(14)では、主名詞にノ(又はコト)が想定される。(14)では「山の際の遠き木末」と「咲きゆく」に主述関係が成立しており、ノ(又はコト)とは格関係が認められない。(14)において、想定される主名詞と準体部とは「外の関係」を成しており、作用性準体であるといえる。改めて確認しておけば、前節で取り上げた無助詞準体句は、全て作用性準体であった。ヲ格準体句に形状性準体が表れるという事実から、格助詞ヲを後接することで、目的格に現れる準体句は自由な連体構造をとることが許容されると考えられる。

以上考察した結果、無助詞準体句と同様の構文構造で、ヲ格準体句を心的内容の契機として理解しうる例は、多くとも以下の4例のみである。

- (45)あすか川下濁れるを(之多尔其礼留乎)知らずして背ななど二人さ寝て悔しも (14/3544)
- (46)萩の花咲けるを見れば(咲有乎見者)君に逢はずまことも久になりけるかも (10/2280)

- (47) 国々の防人集ひ船乗りて別るを見れば(和可流乎美礼婆)いともすべなし  
(神麻績部 嶋麻呂天、天平勝宝7年2月14日、20/4381)
- (48) 鳥じもの海に浮き居て 沖つ波騒くを聞けば(驂乎聞者)あまた悲しも (07/1184)

以上の例についても、無助詞準体句の例と、何らかの違いは見出せるかもしれないが、用例数も少ないため、本稿では特に言及しない。

#### 4. 格助詞ヲと無助詞

以上、無助詞準体句の現れる構文と、ヲ格準体句の現れる構文には、意味的にも形態的にも、明らかな差が見られることを確認した。無助詞準体句が心的内容の契機を表すことと、目的格たる準体句が格助詞を後接しないという形態的特徴は密接に関連している。

本稿では準体句が目的語を表す例のみを考察したが、体言も含めた目的語全般について、無助詞の例と格助詞ヲを後接する例との構文上意味上の差異を指摘する先行研究は多い。

例えば、Miyagawa(1989)は古代日本語について、格助詞ヲを後接しない目的語は、述語と直接隣接していなければならないのに対し、格助詞ヲを後接する目的語は、節内のほとんどどの位置にも出現すること、ただし、従属節(名詞修飾節)の場合は、格助詞ヲは現れなければならないことを指摘する。そして、その理由として、述語動詞の活用形の違いを挙げる。終止形動詞は真性の動詞であり、抽象格を付与する能力を持っているのに対し、名詞修飾節に用いられる連体形動詞は、その能力を部分的にしかもっていないため、格助詞ヲで目的語を表す必要があるとする。確かに、係り結び構文や、連体形接続の助詞を持つ構文においては、動詞が隣接する目的語にも格助詞ヲが現れる。また、Miyagawaは、終止形・連体形以外の活用形について、已然形の節には格助詞ヲが不可欠であると指摘している。Miyagawaは、已然形を動詞連用形とアリの複合した形と考えており、その複合の過程で、抽象格を付与する能力が動詞から無くなったために、已然形の節には格助詞ヲが現れるのではないかと推測している。連用形動詞については、格助詞ヲ、無助詞の例の両方が出現する。その違いは、目的語と述語動詞の距離にあるという。すなわち、動詞が隣接する例には、無助詞の目的語が現れ、そうでない例には格助詞ヲが現れるとする。

しかし、Miyagawa(1989)の指摘は、格助詞ヲの分布に関して、ある程度の傾向を指摘し、説明していると認められるものの、例外も多く、批判検討の余地もある。

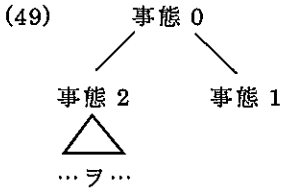
例えば、格助詞ヲが現れると指摘された已然形動詞節について見ると、準体句に限って言えば、目的語の位置に、格助詞ヲが現れる例は5例しかない(34、35、47、48、49)。それに対して、無助詞準体句は24例現れており、Miyagawaの指摘とは異なる様相である。

- (14) うち靡く春来るらし 山の際の遠き木末の咲きゆく見れば(開徃見者)  
(尾張連、08/1422、再掲)
- (15) 秋の露は移しにありけり 水鳥の青葉の山の色づく見れば(色付見者)  
(三原王、08/1543、再掲)

そもそも、上代において、助詞ヲは終助詞や間投助詞としても機能し、ミ語法では主格の位置にも現れる。格を超えて出現するヲの性質を考えると、格関係だけではなく、意味

の側面からも、助詞ヲの有無について観察する必要がある。この立場から助詞ヲを論じたのが金水(1993)である。

「ヲ」は述語に対して上接の名詞句の関係性を表示するという従来の考え方に対し、金水(1993)は、「ヲ」を含む節が表す事態のある種の特徴を、「ヲ」が反映していると考えている。そしてその特徴とは、因果関係の“因”にあたる事態であるとする。



(図は金水(1993)による)

事態 1 と事態 2 がともに言語化される場合、事態 1 は主節、事態 2 は従属節として実現する。ただし、事態 1 は必ずしも言語化されるとは限らず、その場合、事態 2 が主節となるとする。この仮説は、因果関係を構成する構文であるミ語法などをよく説明することができる。しかし、この仮説によっても、(14)(15)のような例を、説明することはできない。(14)(15)の「一見れば」節は、因果関係の“因”となる事態である。しかし、目的語は無助詞で表示される。

以上の論に対し、本稿では、目的語となる無助詞準体句の表す「心的内容の契機」という特徴に注目する。準体句は、連体形終止構文(50)と同じ構造をしている。

(50)夏草の露別け衣着けなくに我が衣手<sup>□</sup>の干る時もなき<sup>□</sup>(我衣手乃 干時毛名寸)  
(10/1994)

連体形終止構文は、以下のような感動喚体句(51)に類する形式として捉えられることが多く、眼前の事物をそのまま叙述し、話し手の感動を表す。

(51)鹿背の山木立を茂み朝さらず来鳴き響もす鶯の声(06/1057)

本稿で確認した無助詞準体句が「心的内容の契機」を表すという様相は、連体形終止構文の意味的役割を強く反映していると言える。形態上の述語の目的語としてではなく、主節で述べられる「心的内容」の契機として、感動の対象を叙述している。

それに対して、格助詞ヲを後接した準体句は、「心的内容の契機」以外の意味も表す。格助詞ヲによって、後続の述部用言との関係が明示され、その目的語として機能するようになったのだと捉えられる。

## 5. まとめと今後の課題

以上、目的語として準体句が現れる例を考察し、格助詞ヲの有無に関する以下のような特徴を明らかにした。

1. 無助詞準体句は、形態上の述語の目的語としてではなく、主節述部に表される「話し手の心的内容」の契機を表す。
2. ヲ格準体句は、心的内容の契機に偏らず、形態上の述語の目的語として機能する。

その理由として、準体句が無助詞である場合、同様の形態である連体形終止文に見られるような、感動喚体的特徴が強く現れるためであることと、格助詞ヲを後接する場合、後続の述部用言との関係が明示され、目的語として機能するためであるという考えを述べた。

ただし、改めて言うまでもなく、目的語のほとんどは体言で表される。本稿は、準体句が目的語を表す特殊な例を調査対象とし、格助詞ヲの有無による違いを、考察したものである。そのため、体言が目的語を表す例に、この仮説をそのまま援用することはできない。しかし、数の多寡ゆえに、従来注目されてこなかった目的語を成す準体句に注目することで、格助詞ヲの有無と上接句の意味的内容が密接に関連している事実を指摘することができたのは本稿の成果であると考え。今後は、調査対象を体言にまで広げながら、考察を続けたい。

【引用・参考文献】

青木博史(2005)「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』第1巻3号

伊藤博(1995)『萬葉集釋注一』集英社

石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店

澤瀉久孝(1957)『萬葉集注釋卷第一』中央公論社

金水敏(1993)「古典語の『ヲ』について」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろしお出版

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広(校注・訳)(1972)『万葉集 二』(日本古典文学全集3)小学館

近藤泰弘(1980)「助詞『を』の分類——上代——」『國語と國文学』57巻10号

竹内史郎(2008)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『國語と國文学』85巻4号

竹内史郎(2004)「ミ語法の構文的意味と形態的側面」『国語学』55巻1号

柳田優子(2003)「上代語の句構造と語順の制約について」『言語文化論集』64号

Miyagawa, S 1989 "Structure and Case Marking in Japanese", *Syntax and Semantics* Vol.22, Academic Press.

小出祥子(2013)「上代日本語における視覚の対象と現実/非現実—「見む」に注目して—」『美夫君志』87号

付記 本稿は2013年に名古屋大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部を、大幅に改稿したものである。博士論文の執筆中、また提出後に、多くの方々から貴重なご教示を頂いた。記して、感謝申し上げます。

(こいで・よしこ 修文大学短期大学部講師)